令和８年度　第１回周南市総合教育会議　会議録（要約版）

（1）　将来を見据えた学校と地域の望ましいあり方を考える～人口減少時代における学校と地域の関わり～

市長	**■進行** ● 最初の議題は、『将来を見据えた学校と地域の望ましいあり方を考える　～人口減少時代における学校と地域の関わり～』
教育政策課長	**■説明** ● ２０２５年・令和７年を基準に、１０年後、２５年後の周南市の人口を推計、０～９歳の階層は３３％減、１０～１９歳代の階層は、４４％と大きく減少の見込み ● 児童生徒の保護者と一緒になって学校活動を支える６０～７９歳の階層も、一旦は１４．６％増加するものの、２５年後には２６．５％減少すると見込まれる ● ７０～７９歳の階層は、３０％減、２１％減と減少傾向が続く見込み ● 人口減少を踏まえつつ、適正な教育環境を作り上げていくためには、学校と地域の関わりについて、現在の姿を前提とするのではなく、将来を見据えながら、本市として望ましい姿を考えていくことが重要 ● 国の審議会である「『令和の日本型学校教育』を推進する学校の適正規模・適正配置の在り方に関する調査研究協力者会議」において、平成２７年に策定された「公立小学校・中学校の適正規模・適正配置等に関する手引」の基本的な考え方は引き続き妥当であると判断しつつ、「学校の適正規模・適正配置」を「教育委員会の視点で検討するのではなく、市長部局を含めた各市町全体でその地域の未来を考える視点」で検討するという観点などが必要であるとの議論をまとめている ● 意見交換を通じて、今後の教育環境のあり方を検討するために、意見や思いを共有させていただきたい

市長	**■進行** ● 本市に限らず、日本では今後も人口減少や少子高齢化が進むことが見込まれる ● 児童生徒数の減少だけではなく、地域活動の担い手不足や、地域コミュニティそのものの変化も想定される中、学校と地域の関係も現在の姿を前提とするのではなく、将来を見据えて考える必要がある ● 本市がどのような教育環境を目指すべきかについて、幅広く御意見をいただきたい ● 本日は結論を出すことを目的とするものではなく、今後の学校規模・配置の適正化につながる視点や考え方を整理する機会としたい
吉本委員	**■意見** ① 学校が守るべき「学びの本質」 ● 教育大綱の基本理念である「こどもまんなか教育」は、今後も重要 ● 同世代の子どもたちが、学ぶ・考える・遊ぶ・ぶつかり合う中で成長することが、学校の重要な役割 ● 「興味・楽しさ・勇気を育む」といった、学校が提供する学びの機会は維持しなければならない ● 人との関わりを通じて「相手の気持ち」や「自分を支えている人の存在」を考える想像力を育てることが重要 ② 子ども同士の関わりには一定規模が必要 ● 現在の学級編制上限は 35 人だが、教員が考える適正な人数として 30 人程度という認識がある ● 多様な友達との関わりや、協働・対立・交流などの経験を通じて学ぶためには、一定の集団規模が必要 ● したがって、単純に「児童生徒数が減るから小規模化してもよい」と考えるのではなく、子どもの学びに必要な集団規模という観点から学校規模を考えるべき

	③ 「学びの本質」と「学びの器」は分けて考える ● 子どもに必要な学びを提供するための「学校の規模・配置・施設」は、人口減少に合わせて見直していく必要がある。 ● 教育の質を守ることと、現在の学校施設・配置を維持することは同義ではない。
岡寺委員	**■意見** ① 最大の課題は、人口減少・学校再編を「自分事」にしてもらうこと ● 保護者・地域住民・子どもたちなど、実際に学校や地域に関わる人たちが課題を自分事として捉えることが重要。 ● 「いつから始めるか」ではなく、すぐに認識を広げる取組を始めるべき。 ● 広報・情報発信だけでなく、実際に地域の人が関り、考える「仕掛け」が必要。 ● 市が結論を示してから説明するのではなく、結論に至るプロセスそのものに地域を巻き込むことが重要。 ② 学校は地域・ふるさとの核 ● 同窓会などを通じても、学校単位のつながりやアイデンティティは非常に強い ● 学校は、地域を離れた人が故郷を思い出したり、戻ってきたりするきっかけにもなっている ● その意味で、学校は単なる教育施設ではなく、地域のアイデンティティや「ふるさとづくり」を支える存在 ● したがって、学校の再編を考える際には、教育面だけでなく、地域とのつながりや地域の将来像も含めて考える必要がある ③ 適正化に地域が関われる土台をつくる ● 学校再編や適正規模の決定そのものは、最終的には行政が判断 ● その前段階で、地域・保護者・これから地域を担

	う人たちが関わる機会をつくることが重要 ④ 地域の担い手を増やすための「仕掛け」が必要 ● 地域活動は、実際に参加してみないと分からないことが多い ● 「誰かがやってくれる」という状態では、自分事になりにくい ● PTAのように、順番でみんなが関わる仕組みがあることで、新しい人や発想が入ってくる ● 現状は地域活動を担う人が固定化しており、同じ人に負担が集中している ● 今後増える定年後世代などにも、地域活動に参加するメリットやきっかけをつくり、地域の担い手を循環させる仕組みが必要 ⑤ 学校と地域施設の一体的な将来像を考える ● 市民センターなどの施設整備について、単に「老朽化したから建て替える」という発想ではなく、将来の地域の姿から考えるべき ● 学校と市民センターなど、近接する施設をどう組み合わせるかを検討する ● 複合施設化などによって、子どもだけでなく多様な世代が交流できる場にする可能性もある ● 施設を建て替えること自体ではなく、「その施設を使って、どんな地域をつくるのか」というビジョンが必要 ⑥ 具体的な検討組織・プロジェクトを立ち上げる ● 適正化について専門的に考えるプロジェクトを立ち上げてはどうか ● そこに学校運営協議会など既存の地域組織も参加させる ● 子どもの数が減っていく中で、学び・育ちの質をどう維持・向上させるかを地域と一緒に考える ● 市がプロジェクトを後押しし、地域で継続的に議論できる場をつくる ● 大学などの外部資源も活用し、適正規模や地域の

	あり方を考える研究・検討の場にしていく
齋藤委員	**■意見** ① 地域の担い手が固定化 ● 「地域で子どもを育てる」という意識は実際に存在している一方で、地域活動やPTAに関わる人が同じ人に偏っている ● 保護者としても、もっと多様な人に関わってもらいたいと感じている ● 今後は、より多くの住民が無理なく学校・子どもに関われる仕組みが必要 ② 子どもの減少によって多様な関わりの機会が失われる ● 1学級となるケースも増え、クラス替えができずに同じメンバーで過ごす状況が生まれている ● その結果、子ども同士の多様な人間関係や経験を得る機会が少なくなっているのではないかという懸念がある ③ 地域との関わりは、子どもの学びや可能性を補う ● 子ども同士の関わりが減る一方で、地域の大人が学校に入る機会は増えている ● 昔の遊びなど、地域の大人だからこそ伝えられる経験や知識を子どもに伝えている ● 多様な大人と関わることで、子どもがさまざまな価値観や経験に触れられる ● 大人の経験を聞くことが、子ども自身の可能性を広げることにもつながっている ④ 学校と地域の関わりは、地域への愛着・ふるさと意識につながる ● 地域活動に子どもたち自身が参加・企画することで、地域への愛着が生まれている ● 子どもたちが地域のためにボランティア活動を考えるなど、主体的な活動も生まれている ● こうした経験が、大人になったときに「ふるさと

	に戻りたい」と思える地域づくりにつながる ● したがって、学校と地域の関わりは、現在の教育だけでなく、将来の地域の担い手・関係人口を育てる意味も持つ ⑤ 学校存続への危機感はあるが、まず「今できること」を続けている ● 子どもの減少から、将来的な学校の統合・廃止への不安が地域にある ● 「学校がなくなるのではないか」「隣の学校と統合されるのではないか」という危機感がある ● 学校が今後どうなるかにかかわらず、現在の子どもたちのために地域として関わっていくことを重視している ⑥ 学校同士の連携によって、子どもの環境を改善していく ● 小学校と中学校の間でも、互いの取組を参考にしながら改善する動きがある ● コミュニティ・スクールなども活用しながら、学校単位で閉じず、学校同士・地域同士で知恵を共有することが重要
松田委員	**■意見** ① 学校と地域の関係は、以前より大きく変化している ● ここ10年ほどで、地域住民が学校に入ったり、学校と地域が一緒に活動したりする機会が大きく増えた。 ● その結果、子どもと地域住民がお互いに顔を知る機会や、子どもの活動の幅も広がっている。 ② 大人との関わりが増えることが必ずしも子どもの成長にプラスとは限らない ● 地域の大人が子どもに関わること自体は非常に良いが、関わりすぎると、子どもが大人に頼るようになる可能性もある。 ● 本来、子どもが自分で考えたり、失敗したり、少

	し無茶をしたり、新しいことを試したりする機会においても大人が先回りしてしまう可能性がある。 ● 「大人が支えること」と「子どもが自分で育つこと」のバランスが重要。 ● 「地域で子どもを育てる」＝「大人が子どもを指導する」ではない ③ 地域の大人には「先生ではない大人」として関わってほしい ● 地域の良さは、学校の先生とは違う。さまざまな大人がありのままで子どもと関わることが重要。 ● 大人によって言うことや価値観が違うことで、子どもは「いろんな考え方がある」と知ることができる。 ● 同じ行動でも、ある人には褒められ、別の人には叱られる、といった経験も子どもの成長につながる。 ● 地域の人が学校の「先生」のように教育的に振る舞いすぎると、せっかくの多様な関わりが失われる。 ④ 子ども同士の関わりを守ることが重要 ● 子ども同士は、同年代だからこそ、未熟さや失敗、喧嘩、トラブルを経験する。その中で相手との関係を学び、自分自身も成長していく。 ● 学校には、こうした「子ども同士で学ぶ時間」という、目に見えにくい学びの機会がある。 ⑤ 小規模化によって「子どもの世界」が狭くなることを危惧している ● 子どもの人数が減ると、クラス替えができなくなり、同じメンバーで長期間過ごすことになる。 ● クラス替えは単なる人員配置ではなく、「人間関係の世界を広げる」役割を持っている。 ● 適正規模は施設維持や学校運営の問題だけではなく、「子どもの育ち」の問題として考えるべき。 ⑥ 大人にとっての「安定」と、子どもにとっての「成

	長」は違う ● 大人から見ると、同じ人間関係が続くことは安定した環境に見える。 ● しかし子どもにとっては、環境が変わり、新しい人と出会い、適応する経験も重要。 ● 変化に対応する経験そのものが、子どもの成長につながる。 ● 教員もしっかり見ておかなければならないが、手を差し伸べるのは最小限という視点を持たなければならない ⑦ 将来の子どもの環境を具体的に想像し、早く動く必要がある ● 人口減少は既に見えており、25年後に児童数が現在の4分の1・5分の1になるとしたら、子どもたちはどんな環境で育つのかを今から想像する必要がある ● 行政には、子ども同士の世界を意図的に広げるような環境をつくる役割がある ⑧ 地域の枠も広げる ● 一つの地域だけで活動していると、どうしても同じ人ばかりになる ● 隣接する地域と一緒に活動することで、新しい人・価値観・つながりが生まれる ● 子どもの世界だけでなく、大人のコミュニティも横に広げることで、地域全体の可能性を広げられる ⑨ 昔の良さの再現 ● 昔の祭りなど、地域全体が関わる場には、子どもが多様な大人と関わる機会があった。 ● 「今で考える」のではなく、将来の子供をどうするかっていうところを考えて欲しい。 ● 昔の自分たちの子供の頃における良さを再現
各委員	**■岡寺委員コメント** 学校と地域の関係が個々人の経験や感覚に依存して

	いるため、双方が望ましい関わり方を学び、共通認識を持つ機会が必要。ただし、多様な意見を尊重することと、関係者が増えすぎてまとまりを欠くこととのバランスも考える必要がある **■松田委員コメント** 地域の大人には、子どもを指導する『先生』としてではなく、多様な価値観を持つ一人の人間として関わってもらう。その中で、大人同士の意見の違いや衝突、折り合い、仲直りなど、本物の人間関係を子どもが見る・経験することが、社会性や人格形成につながる **■吉本委員コメント** 地域の大人の関わりでも、善意による過干渉が子ども自身の学びを奪う可能性がある。子ども同士の衝突や交流によってしか得られない経験を確保した上で、大人が関わることが、適正規模・適正配置の考え方として重要 **■齋藤委員コメント** 地域にある大学を地域資源として活用し、大学生を子どもと地域をつなぐ『身近な先輩世代』として巻き込むことで、子どもの参加や地域活動の活性化につなげられる **■市長コメント** 人口減少により地域活動の担い手が減る中、学校・保育園などの教育関係者を新たな地域の核として巻き込み、世代を超えて地域活動を支える仕組みをつくる必要がある
教育長	**■意見** ①「残したい」という思いがあるなら、形を変える必要がある ● 三作神楽や貴船祭では、伝統を残したいという思いから、地域だけで担う形を変化させている。つまり「残すこと」と「昔と同じ形を維持すること」は同じではない ● 将来も残したいのであれば、状況に合わせて早めに形を変えていく必要がある

	● 変化を恐れて先送りすると、担い手が限界になってから対応することになり、かえって選択肢がなくなる ② 子どもが育つ環境として適正規模の学校が必要 ● 子どもが同世代と関わり、喧嘩や悩み、意見の違いなどを経験できる場は学校だからこそ確保できる ● 家庭だけでは異世代との関わりが中心になり、同年代の集団での経験を十分に代替できない ③ 1学年1クラスでは、人間関係・考え方が固定化する ● 1学年1クラスになると、同じメンバー・同じ人間関係で長期間過ごすことになる。それが人間関係や考え方の固定化につながる可能性がある ④ 地域コミュニティも、現在の小学校区単位を前提にし続けるべきではない ● コミュニティ・スクールなどによって、学校と地域のつながりは強まっている ● 一方で、地域の担い手減少を考えると、現在の「小学校区＝地域コミュニティ」という仕組みも限界が来る。学校と同じく地域コミュニティの単位や仕組みも一緒に見直す必要がある ⑤ 「今のままでいい」という意識を変えるための対話が必要 ● 変化に対しては当然、「今のままでいい」という意見が出る。だからこそ、いきなり結論を押し付けるのではなく、みんなで話し合い、自分事として考えてもらうことが重要。 ● 意見がぶつかっても、対立ではなく意見交換を重ねることで意識を変えていく。 ● 部活動の地域展開も、当初は「今のままでいい」という意見が多かったが、時間をかけて取り組むことで、肯定的に受け止める人も増えてきた。 ● 最初は抵抗があっても、将来を見据えて早めに動き始めることが重要。

（2） しゅうなんコミュニティクラブの活動について

市長	**■進行** ● 次の議題は「しゅうなんコミュニティクラブ活動について」
生涯学習課	**■説明** ① コミクラの目的・仕組み ● 地域クラブの一つとして、市が直営で運営 ● 中学生が主役となり、「やってみたいこと」を自分たちで考え、企画・活動 ● 指導者が活動内容を決める従来型の部活動とは異なり、生徒の主体性を重視した活動 ② 運営体制 ● 中学生を支える「コミクラサポーター（コミサポ）」5人を配置 ● コミサポは指導者ではなく、安全管理、活動への助言、地域・関係機関との調整を担当 ● 事務補助として会計年度任用職員1人を配置 ● 立ち上げ・伴走支援やスタッフ研修は外部事業者に委託 ● 周南公立大学の学生や地域住民も協力スタッフとして参加 ③ 活動の特徴 ● 「仲良くなる」 →「やりたいことを話し合う」 →「企画する」 →「実際に活動する」 →「振り返る」 ● 活動内容はクラブごとに生徒自身が決める ● 地域住民と一緒に活動することもあり、世代を超えた交流の場にもなっている

	④ 1学期の実績 ● 登録者：77人 1年生 49人 2年生 16人 3年生 12人 ● 活動回数：51回 ● 延べ参加者：264人 ● 13中学校区のうち、鼓南中は令和9年度から開始定 ● 太華中・鹿野中は登録者が少なく、1学期は活動なし ● 今後、部活動終了後の生徒を対象に追加募集して登録者を増やす予定 ⑤ 活動事例から見える成果 ● 住吉中：地域探索をきっかけに「ケーキを作りたい」という発想が生まれ、市民センターを自分たちで見学・活用してケーキ作りを実施 ● 須々万中：やりたい活動が分かれた際に、生徒同士で話し合い、「ダンス→バスケットボール」と組み合わせて両方実施 ● 秋月中：異なる学年の生徒が自然に交流し、テスト後のお菓子づくりを企画 ● 「大人が用意した活動に参加する」のではなく、生徒自身が考え、話し合い、地域資源を使いながら活動を作っていることが成果 ⑥ 地域との接点も生まれている ● 地域によっては住民が協力スタッフとして中学生の活動を支援 ● 市民センターなど地域施設を活動場所として活用 ● 地域の主事などが生徒と一緒に活動するケースもある
岡寺委	**■コメント**

員	①自分で活動を選択できる ● 自分自身は中学生の頃、強制的に部活動に入った経験がある。それと比較して、コミクラの「自分でやりたいことを決める」という仕組みは非常に魅力的に感じる ②「やりたいこと」の可能性をもっと広げてほしい ● 生徒が思いついたことを実現できるよう、活動の「器」をもっと広くしてほしい ③「希望を出せば応えてもらえる」という受け皿が重要 ● 「やりたい」と思ったときに、それを実現するための人・場所・知識につなげてもらえる仕組みへの期待 ④可能性が広がる場として評価 ● 単なる部活動の代替ではなく、生徒の発想次第で活動がどんどん広がっていく可能性を感じる
齋藤委員	**■コメント** ①生徒が自分たちで考え、やりたいことを決めて実行 ● ケーキ作りや黒板アートなど、活動内容を大人から与えられるのではなく、生徒自身の発想から生まれていることを評価 ②従来の部活動との違い ● 自身は部活動は強制という感覚で活動していた経験があり、コミクラの自主性をうらやましく感じている ● 「やりたいことを自分で選び、実現できる」こと自体が、従来にはなかった魅力 ③活動内容の自由度・創造性に期待 ● 遊びや創作など、一見学校では出来なさそうなことにも挑戦できる点を肯定的に捉えている
松田委員	**■コメント** ①コミクラの「子ども主体」の姿勢を高く評価 ● 子どもが「ここにいていい」と感じられる、安心

	して参加できる場になっている ● コミクラサポーターが指示するのではなく、子どもの「やってみたい」を引き出し、実現することを重視している点を評価 ②学校・従来の部活動とは異なる価値 ● 学校では「先生がさせる」「子どもがやらされる」という構造になりやすい ● コミクラでは、大人が答えを与えるのではなく、子ども自身に考えさせる関わりができている ● 人数が少ないクラブでも、一人ひとりに丁寧に関われるというメリットがある ③地域の大人が子どもと一緒に活動する意義 ● 市民センター職員や地域住民が、単なる「指導者」ではなく、子どもと同じ目線で一緒に活動している ● かつては地域で集まれば子ども同士が関わる場があったが、それがコミクラによって再び生まれている ④成果を急がず、長期的に見守る必要 ● 短期的な成果だけで評価せず、長い目で子どもの変化を見ながら育てていくことが重要 ● サポーターを専門的に支援する体制があることも評価 ⑤今後の課題 ● 少人数だからこそできる丁寧な関わりは、人数が増えた場合には難しくなる可能性がある ● 秋月中・周陽中など先行している事例を共有すると良い ⑥保護者への周知・理解の拡大も必要 ● コミクラの良さを保護者にも積極的に伝え、口コミなども含めて参加への理解を広げていくことを期待
吉本委	**■コメント**

員	①「やりたい」と自分の言葉で表現できることを評価 ● 子どもが自分の希望や思いを素直に口にできる環境は良い ②「やりたい」を実現するために考えるプロセスに価値がある ● 「どうせ無理」と諦めるのではなく、やりたいのであればどうすれば実現できるかを考える経験が重要 ③大人になると失われがちな主体性への気づき ● 大人になると周囲の目を気にして、自分の「やりたい」を抑えてしまいがち ● そのため、子どもが自由に「やりたい」と言える姿を羨ましく感じている
教育長	**■コメント** ①今後、参加者が増える可能性に期待 ● 夏の大会終了を契機に、部活動を終えた3年生を中心に地域クラブへの参加が増える可能性がある ②「やってみたい」を実現するための場 ● コミクラだけでなく地域クラブ全体として、子どもが「やってみたい」と思ったことを形にできる環境を用意することを目指してきた ● スポーツや文化活動以外にも、やりたいことを実現する選択肢としてコミクラを認識してほしい ③今後への期待 ● 現状について「人数が少ない」「これでいいのか」といった評価があることは認識している ● 始まったばかりなので、一定期間は試行錯誤を見守りながら成長を見てほしい ④今後は学校・地域を越えた交流も想定 ● 他の地域・学校の活動を知ったり、実際に他校の生徒と交流したりする展開も当初から想定している

	● 子どもたちの主体性だけでなく、同世代・異世代と関わる力も育てたい